

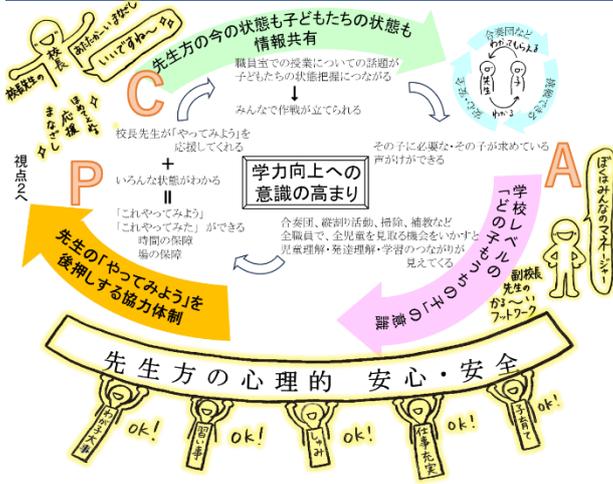
令和6-7年度 検証改善サイクルモデル校 長島小学校の実践について

令和8年2月5日総合教育センターで行われた、第69回岩手県教育研究発表会「特設分科会I学力向上」において、検証改善サイクルモデル校である平泉町立長島小学校が、令和6年～7年度の実践を発表しましたので紹介します。

調査結果を活用し、学年や教科を越えた授業改善を推進する「学校の組織的な取組」の実践から



視点1：全教職員で取組を推進するための組織運営



「**提言**」校長のリーダーシップのもと、全職員で全児童を理解し、教職員一人ひとりの「やってみよう」が実現できる学校風土づくり

長島小では、先生方の横のつながりを大切に、校長先生のリーダーシップ、副校長先生の指導の下、全教職員で全校児童を育てる意識を大切にしています。そのために、職員室で様々な話題で語り合うことを心がけており、授業づくりや児童のつまずきなど、学力向上についても日常的に話題にしています。

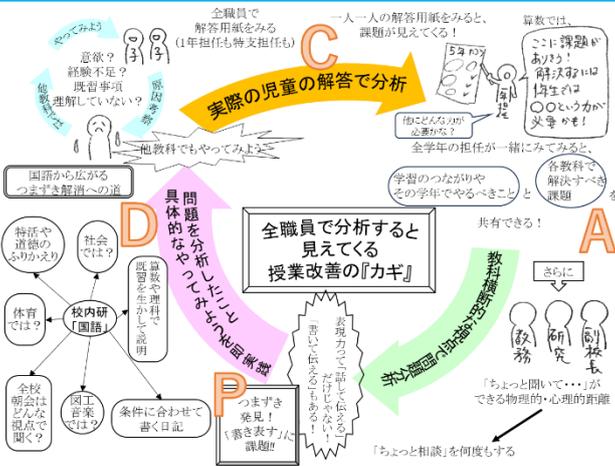
視点2：学年や教科を越えた組織的な授業改善の推進



「**提言**」授業改善はチーム戦! 職員一人ひとりが「自分事」として授業をデザインし、児童の「できそう」「わかった」を生み出していく

「チーム」で授業改善を行っていくために、事前研を大切にしています。授業者が授業構想を本格的に立てる前に単元の大体の構想を提示し、他の先生方と想定される課題を共有したり、アドバイスをもらったりする「事前研」を行っています。授業者のみならず全員で授業づくりを行い、一人一人が当事者として成果と課題を明確にしています。

視点3：調査結果の積極的活用



「**提言**」つまずきを授業改善の「カギ」に! 解消への道は「すぐ実践」から始まっていく

研究協議後には先生方一人一人が「自分の授業で生かせようなこと、やってみたいこと」を考え、全体で共有したことを研究通信として発行しています。授業研をどの先生も自分事として考え、共通の意識をもつことで、授業研究の活性化が図られています。

諸調査結果の分析の際には、全教職員で児童一人一人の解答用紙を用いて分析し、「教科の課題」と「学年や教科を超えた課題」を洗い出しています。見いだした「学年や教科を超えた課題」について、つまずきを解消するための具体的な取組を全員で検討し、各教科等の授業ですぐに実践しています。また、主題研究の手立てについても再検討し、研究推進につなげています。このように、調査結果ごとにCAPDサイクルを回し、検証改善の取組を進めています。

長島小学校からの提言

- ・ 校長のリーダーシップのもと、全職員で全児童を理解し、教職員一人ひとりの「やってみよう」が実現できる学校風土づくり
- ・ 授業改善はチーム戦!職員一人ひとりが「自分事」として授業をデザインし、児童の「できそう」「わかった」を生み出していく
- ・ つまずきを授業改善の「カギ」に!解消への道は「すぐ実践」から始まっていく